

■ 書 評



洛北岩倉と精神医療 —精神病患者家族的看護の 伝統の形成と消失—

中村 治 著
世界思想社
2013年9月 164頁
本体価格 1,900円+税

「京都の北郊にある岩倉には、後三条天皇の第三皇女が今で言う精神病を煩った時、大雲寺の観世音に祈願し、大雲寺の井戸の水を飲んだところ、その病が治ったという伝承があり、古くから精神病患者が岩倉に集まっていた」（本書 序章より）

大雲寺の古井戸は現在も存在している。精神医療の歴史に関心があり、わが国最古の精神障がいコミュニティ・ケアと関連するこの言い伝えを見知っている方もいらっしゃるだろう。

本書は、この大雲寺の井戸を有する岩倉地区において発生した、世界的にも希有な精神障がい者への家庭的看護について、18世紀から近代までその流れを論じる歴史と社会学の書籍である。

精神医学の一臨床家には、大雲寺縁起についての古文の引用は難解であったが、中世以降になると、現在の臨床の感覚とも照らし合わせて読むことも可能で、歴史的、社会学の専門書ながら、読みやすい内容と思われる。また読了してみると、もっと長大な分量になったであろう歴史が、140ページ弱の分量に収まっており、無駄のない構成にも驚嘆させられた。

岩倉のコミュニティ・ケアについての歴史が時系列にそって論述される一方で、呉秀三による岩倉の家庭的看護への意見や、ドイツのコミュニティ・ケアで有名なゲールとの比較論なども織り込まれ、単に歴史を年表順に記した資料にとどまっていない。

本書の冒頭でも述べられているが、著者自身が、岩倉地区の出身である。序章と終章において、著者が岩倉のバス停留所にて下車する際、乗り合

わせた乗客が明らかに精神障がいを持つ当事者で、「なんだ、あんたも病院に行くのか」と問いかけられたなど、筆者自身の個人的なエピソードもいくつか紹介されているが、微笑ましい話ばかりではなく、この地域出身ゆえにあらぬ偏見にもさらされた述懐もある。

よって、個人的な思い入れが歴史的な事実を曇らせてはいないかとも懸念されたが、主観と客観は明確に分けられ、かつ客観的な史実に多くの紙面を割いて、当時を知る人へのインタビューから、大正時代の本誌のような専門書などの膨大な文献から、淡々と論ぜられる点にも好感が持てる。批判にもさらされてきた岩倉のコミュニティ・ケアを、再検討する9～11章において、思い入れが強くとも冷静に筆を進める著者の姿勢が、議論を真実へと近づけていると感じられた。

本書の主題である「家庭的看護」においては、病院の閉鎖的な環境ではなく、一般の家庭で専門性もない家族とともに暮らすことで実践されたケアで、「脱施設化」をめざす現在の精神医療の観点からも、価値あるものに見える。当時も法的な規制があったにもかかわらず、呉秀三はじめ、国内外の精神医療の牽引者も注目していたが、呉が在任していた東京府立松沢病院をはじめ、他の多くの地域で実現できなかった家庭的看護が、なぜ可能であったのか？ 著者は岩倉のケアは「地域住民の志高き思想に基づいて行われたのではなく、『慣れ』によってなし得た部分が多い」と、地域住民でもある著者が言い切るのは、精神医療の臨床と社会学、歴史学の観点はベクトルが違って感じられる一方で、歴史という別の次元から、我々への重要なヒントを投げかけているようにも感じられる。「精神障がい者が地域から必要とされているか？ 何か役割を与えられているか？」という点が、岩倉のケアの終焉の部分で重視されている。これは雑事に忙殺されるとなかなか見えにくくなるが、普段の臨床の中でも、重要な視点ではないか？

(今村弥生)